

戦後70年記念誌

平和への 願い

～戦争のない明日を築くために語り継ごう～

長久手市



長久手市

<https://www.city.nagakute.lg.jp>

長久手市非核平和都市宣言

恒久平和は、人類共通の願いです。

しかし、世界各地では、今なお武力紛争が絶えず、さらに非人道的な兵器である核兵器の存在により、人類がその脅威にさらされています。

また、核兵器は、紛争地域だけにとどまらず、人類の発展と地球環境に甚大な被害をもたらすこととなります。

私たちは、世界で唯一の戦争被爆国の国民として、この地球上から核兵器を根絶しなければなりません。

長久手市は、平和の願いを新たにするとともに、非核平和を目指す自治体と手をつなぎ、平和活動に尽力することを決意し、ここに「非核平和都市」であることを宣言します。

平成26年9月30日

長久手市



長久手市非核平和都市宣言記念碑
設置場所／長久手市役所 本庁舎玄関前

この「長久手市非核平和都市宣言」は、平成26年第3回長久手市議会定例会において
全員一致で議決されました。

目次

長久手市非核平和都市宣言	2	広島平和体験学習感想文	30
市長挨拶	3	加藤 春香	30
発刊に寄せて(アドバイザー)	4	笹瀬 広之	31
戦争体験談 寄稿文		佐藤 菜乃子	32
		中山 七海	33
		三岡 美咲	34
		尾川 涼華	35
		寺田 琴音	36
		山田 優	37
		尼元 和磨	38
		及川 勝二	39
		赤峰 ゆき	40
		半澤 遥	41
		日高 涼輔	42
		野田 周佑	43
		渡辺 堇	44
		あとかぎ	45
コラム・B29墜落す	25		
『香流川物語』			
―長久手・猪子石の今昔―より	27		



提供:長久手絵手紙楽しむ会

「長久手市戦後七十年記念誌」の発刊にあたって

長久手市は、核兵器の廃絶と恒久平和を願って、平成二十六年九月三十日に「長久手市非核平和都市宣言」を行いました。その翌年には、市役所本庁舎正面に記念碑を建立するとともに、市内の主要な公共施設に非核平和都市宣言パネルを設置しました。戦後から七十余年の時が経過しました。戦争体験者も高齢化し、働き盛りの大人であっても戦争の実際の有様を知らないため、戦争は縁のない遠い世界の話になりつつあります。戦争体験者が次の若い世代に戦争の悲惨さについて語り継いでいく時間は、それほど多く残されているとは考えられません。

そこで、本市では、本年五月三十一日に長久手市平和事業推進委員会を発足し、その活動の一つとして、この戦後七十年記念誌作成事業に着手しました。

市民を中心にすすめられた記念誌作成事業は、市民からの戦争体験談寄稿者、公募委員及び学識経験者で構成された委員会において、記念誌の構成に関する議論などを行い、この度の発刊となりました。この活動における市民のみなさんの取組は、高齢の委員が多いにもかかわらず、短期間で熱意を持って精力的に取り組んでいただけことから、将来に向かって継続的に平和事業を充実させていくための原動力として不可欠であると痛感しました。

この委員会では今後、委員が自ら語り部となる「戦争体験を聞く集い」や「原爆写真パネル展」を開催する予定です。将来的には、戦争体験者への聞き取りや戦争に関する資料の収集などを継続していただき、記念誌の改訂版の発行を視野に入れた活動にも期待するところです。

行政である事務局は、あくまでも市民のサポート役であり、市民の意見を尊重して参りました。行政ができることには限界がありますので、市民の皆さんの御協力を得て、今後も平和事業の充実に目指してまいります。

是非、この冊子を一人でも多くの方に御覧いただき、平和について考えるきっかけにいただければ幸いです。

平成二十八年八月



長久手市長
今田一平

発刊に寄せて

〈小林元 アドバイザー〉

「どこかで戦争が始まるといいなあ。物が売れて景気がよくなって、おれたちも助かる」

今から八十年ほど前の昭和の初期の大人たちの会話です。日清・日露戦争から大正時代の第一次大戦のころ、日本は勝ち組でした。戦争は二年以内で終わり、相手から賠償金や領土の割譲を受け、日本は儲かったのです。しかも戦場となったのは日本国内ではなくて、朝鮮半島や中国の領土でした。

ところが昭和に入ると、世界大恐慌もあって、人々は長い不況に苦しみました。これが戦争待望の背景でした。そして戦争はまた始まりました。日本軍は中国本土に侵入し、北京、上海、武漢、広州などの重要拠点を占領しました。しかし中国は降伏せず、四年を経ても戦闘は終わらず、短期に日本が勝利という目論見は外れました。日本は国力を消耗し、食糧、衣類、燃料など生活に必要な物資は配給制になって、人々の生活水準は低下しました。この泥沼から抜け出そうと、日本は大きな賭けに出ました。中国を援助するアメリカ、イギリスなどを相手に、戦線を拡大しました。その結果は皆さんがご存知のとおりです。

それまで戦争は国外で行われたので、多くの日本人の間に、本当の意味での戦争体験がなかったのです。日本の本土は激しい空爆に晒され、沖縄では悲惨な地上戦、広島、長崎には原爆が投下されました。ここで大多数の日本人は、はじめて戦争のむごたらしさを実感しました。

それから七十年の歳月が過ぎ、戦争の悲惨さを知る人は、日毎に減っています。しかし現在でも世界の各地で戦闘が行われ、直接の体験者を新しく生み出しています。私たちは戦争体験の有無に拘らず、平和について常に考え、勉強することが大事です。貴重な体験を一つでも多く語らい記録して、記念誌を発行し、展示していただく意義は、この上もなく大切なことです。

発刊に寄せて

〈安井俊夫 アドバイザー〉

平成二十七年は終戦七十周年、人間でいえば、古希の長寿を祝う年であった。国をはじめ日本の各地で、記念行事として戦争と平和に関する講演会や展覧会などが数多く開催された。平和の重みやありがたさが、再認識、再評価された年でもあった。

こうした中で、私たちの長久手市は、平成二十六年九月二十日に「長久手市非核平和都市宣言」を定めた。更にその都市宣言の実効性を高めるために、市民から要望の強かった戦後記念誌を発行することになった。これまでも個人で体験談を書きまとめ、語り部活動を行ってきた人もあり、積極的な取組体制として市民主体の委員会が設けられた。

高齢者揃いの委員会にも拘らず、自らの戦争体験をぜひとも次の世代へ伝えたいという皆さんの熱意がこの体験談に美事に結実し、爽りの多いものになったと確信している。

併せて中学生十五人の感想文「平和への想い」は、体験談と並んで平和への若き想いがしっかりと書きまとめられており、心強く想う。

戦争体験談 寄稿文

太平洋戦争が終って今年で七十一年。有史以来経験したことのない激しい戦争と敗戦。多くの人命が失われ、国土は都市を中心に焦土と化し、全国民が戦乱の苦しみを経験しました。

この歴史を知る人も今や少なくなりました。後世に戦争の悲惨さを伝えることを目的とし、広報にて募集、市民の方から寄稿していただいた貴重な体験談を、次の世代を担う人達へのメッセージとして送ります。



鎮魂シベリアに眠る父を想う

【昭和二十年(1945)の夏】

終戦の年、私はまだ六歳小学一年でした。連日の空襲で、夜は裏庭の防空壕で米爆撃機B29の巨体に怯えながら過ごしました。また、西空を見れば真っ赤に染まり雨の様に降る焼夷弾がキラキラと光り、たとえ様のない光景でした。これが地獄絵というものか。父の勤めていた三菱の航空機エンジン工場(東区大幸地区)が猛火に包まれ、瓦礫の山と化したのもその頃(昭和十九年十二月)でした。幼いながらも日本もお終いか、この先どうなるであろうかと不安と恐ろしさに怯えながら、生涯忘れられない暗い日々でした。

そして、終戦の八月十五日、暑く焼けるような日。昼に何か重大な玉音放送とかを聞かされるもよく理解できなかったが、母が日本が負けて戦争は終わったらしいという。祖父母も近所の人も、ラジオの前で黙って顔を伏せたままでした。でも父が満州から早く帰れるのではと、淡い期待を抱いたことも事実でした。その後の生活の苦しさは例えようもないが、生きるための食糧だけは自給が出来、子供たちは家族の一員として野良仕事の手伝いもし、飢えをしのぐことは出来ました。その後一・二年の間、戦死された人の葬儀が毎週のようにありました。祖父母も新聞・ラジオの復員者便りの中に父の名を探し続けました。やがて、ある冬の寒い日、たった一枚の公報が届き、それには父の死亡、「ソ連シベリア地区で戦病死」と。母が信じたくない気持ちも耐えられず、肩を震わせながらどっと泣き崩れる姿は何時までも忘れられず、幼いながらどれほど戦争を恨んだことが。これが少年期のトラウマでも



長久手市岩作早稲田
松原 永吉さん



名古屋空襲 三菱の工場炎上す 岩作御嶽山付近から西を望む(想い出) スケッチ:松原 永吉

スケッチ:松原 永吉

ポタ山のある炭鉱の集落(スケッチ)
ブカチャーチャ収容所付近
あの忌まわしい収容所(ラーゲリ)は
朽ち果てていた。



あったのです。葬儀を済ませてからの母は、朝から晩まで黙々と働きました。寝る前にいつもこつそりと新聞の帰国者だよりに父の名を探し続け、何時までも叶わぬ望みを棄て切れ無かったようです。その後、祖父母や皆さんの支えもあり、寂しさに耐えながら何とか少年期を過ごすことが出来ました。

【シベリアの墓参 平成四年(1992) 凍土に眠る父らに会う】

戦後四十七年(平成四年)旧ソ連がペレストロイカによる新政権になり、念願のシベリアの墓参の受け入れの知らせがありました。でも高齢の母がああ僻地に出かけるのはとても難しい。しかし、本人はその地に立ちこの目で確かめたい思い絶ち難く決行しました。

父たちが行先も知らされず送られたあのシベリア鉄道に揺られ二日間、抑留されたと言う寂しい炭鉱のある町に、ホテル代わりに寝台車を切離しそこで停泊しました。そこはバイカル湖の東、見渡す限りの草原で荒れた集落が散在し、その光景は五十年前のまま、時が止まったようだという。石炭のポタ山の向こうに父らが埋葬されたはずの丘があり、その目じるしの一本松だけが朽ちて株だけが残っていました。

【凍土の中から】

翌日その草むらをそっと掘ると、目をかっと見開いた骸骨が解けた凍土の中から語りかけた。

『いつの日かきつと故郷に帰るぞ。思えばこのシベリアに捨て



られて極寒の冬も四十七度を数え、夕日を背に東へ飛び去る雁の群れに幾度涙したことか。この無念さを、もう一度、聞いてほしい。昭和二十年の終戦の秋、帰国を信じる我々を虫けらの如く祖国とは逆の西へ北へこのシベリア鉄道で連れ去り、どこか知らぬがこの地の炭鉱で酷使した。暗黒の坑内に這いつくばって、痩せた身に鞭打つての作業は耐え難く、多くの友が犠牲になった。夜は俄かづくりの収容所のため極度の寒さで安らぎを得ることは出来なかった。食糧はなくマッチ箱のような小さな黒パン、時には他人のそれを奪い合うあさましき餓鬼の毎日だった。ただ一時疲れ切った身を草むらに横たえてあのヤゴタの実(コケモモ、ブルーベリーの一種)をたべた味は忘れられない。持ち帰り我が庭にさかせたい。

その年の暮れマイナス四十度もの猛烈な寒さが襲う。しかし着るものもない。その上不衛生なラーゲリ(収容所)にチフスが蔓延し皆が次々と倒れた。治療するすべもなく地獄の様だ。

遂に自分も高熱に冒されて頭が割れんばかりに痛みうなされる。瞼にわが妻子、親兄弟が浮かぶが手が届かない。やがて睡魔がおそい気が遠くなる。このまま死にたくないと呼ぶも声にならない。やがてあの極寒の空の下、凍土の上に捨て置かれる。満天の星空が輝いているが、わが服をもはぎ取られ体が凍つき動かない。そして雪が積もり、夏が来れば草が覆い、年を経るごとに空が見えなくなる。ああ俺は死んでいるのか。でも必ずや帰るぞ。日本は何をしてくれたのか。思えば祖国のためと駆り出され、この地獄のような地に送られたまま、何十年も放置されるとは許し難い。さらに旧ソ連のこの残酷な抑留の恨み、筆舌も及ばない。戦いが終わった後にここに連れ去り、劣悪な環境で酷使し、幾万もの同朋を死に至らしめるは、国際法からも、人道上からも許しがたき蛮行だ。またわが軍の上層部は満州に幾多の民衆を置き去りにし、先に国へ逃げ帰るとは許せない。これらの事実を決して忘れることなく、後世に伝えてほしい。

また今の日本は豊かで繁栄に酔いしれてると聞くが、時にはこの犠牲の苦しみを思い起こしてほしい。

いま目の上の草、土を取り除いてくれたのか、まぶしい青き空の下、見えるは愛しきわが妻子か、兄弟か』



シベリアの大地に眠る

スケッチ:松原 永吉

やがてその黒く光る骸の厳しい眼差しが微かに微笑みかけるかのように泪越しに霞んで見えた。『おう、お前たちか。よく来てくれた。これ以上言つまいい、一緒に連れ帰ってくれ。そして祖国の故郷でゆつくりと眠らせてくれ。』と語りかけた。

【終りに】

ここに斃れた千幾百の英霊のご冥福を祈り、後日必ず日本にお迎えできる事をお約束して、合掌した。その後遺骨の一部は収集され東京の千鳥ヶ淵戦没者墓苑に収められたとき。今年はその千鳥ヶ淵へ慰霊に行き、その後を報告をして来ようと思います。真の平和の尊さと命の大切さをもう一度見つめ直し二度と過ちを繰り返してはならない。

昨今の世の動き、特に政治、組織体制の暴走がありはしないか心配です。また我々には核兵器廃止はもちろん、原発も踏みとどまる勇気が必要な時と思われてならないのです。

現在の想い

松原 永吉さん

目まぐるしく変わる世の動き、目先の事象に翻弄され、自分たちのあり様を見失いかけている。そんな気がしてならないのです。

目には目をという争いのエスカレート、一触即発の戦争のリスクと背中合わせであることを考えねばならないと思います。ある物理学者が無限なるものは宇宙と人間の愚かさだという。核による人類滅亡を意味しているか？

戦争の悲劇は罪のない人々、とくに幼い子供たちにその犠牲を強いるのです。それが我々年老いた人間には最も許せない事なのです。この終戦七十年の節目に過去を振り返り明日を見つめることも大切です。特に先のある若い人たちをお願いしたいのです。

あの戦争はなぜ起きたのか、止められなかったのか、そしてあの悲劇、泥沼から這い上がったあの姿など後世の皆さんにもう一度お伝えするのが最後の務めだと思っています。

東京大空襲を体験して

長久手市岩作東島
倉地 ふみ子さん



戦争末期に日本の降伏を促めたピラのひとつ。B29より投下された。

所有：倉地ふみ子

私は、昭和十八年に夫と結婚して上京し、杉並区方南町で戸建てを借りて暮らしていました。翌年には長男を授かりました。夫は、赤紙と呼ばれる召集令状で軍隊に召集されました。入隊は地元部隊になるので、勤務地であった東京からいったん出身地の長久手に戻ってきました。ところが、部隊の訓練中にお腹の病気に罹り、陸軍の野戦病院に三か月ほど入院していました。その間に所属部隊は戦地に行き、その部隊の戦友は、皆亡くなりました。偶然、病気になったことで夫は、命拾いをしたのです。回復後は、他の部隊に所属することもなく、昭和十九年に再び夫の勤務地である東京へ家族で戻ることになりました。

東京での生活は、アメリカ軍による空襲におびえる日々でした。当時は、食べ物も不足していて、家族に対して三日に一本、ねぶか(ねぎ)の配給があるだけでした。時々、電車で十分ほど乗って新宿まで行き、ひば(大根の根を乾燥させたもの)を行列に並んで買い求めたものでした。

特に恐ろしかった焼夷弾による空襲は、夜間に半年間行われました。夜、警戒のためにラジオのスイッチを入れっぱなしにしておく、「ブー、ブー」と鳴り、その後、「空襲警報発令・・・」と放送が続いたも

のでした。一個の焼夷弾は、落下途中でいくつも六角形の筒に分裂し、その筒が地面に触れると破裂発火しました。中でも油脂焼夷弾は、破裂すると油が飛び散り、手に触れるとなかなか火を消すことができませんでした。

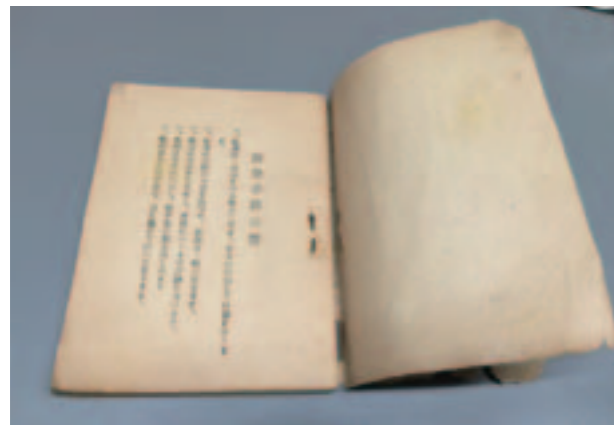
このような状況では、夜はいつでも逃げられるように「もんぺ」を着用していました。私は、小さな子どもを抱えており、とても安気に眠ることができませんでした。夜になると警防団が街をまわり、家の明かりを消灯するよう呼びかけていました。空襲時の避難場所は決まっておらず、警防団があっちへ行け、こっちへ行けと指示するものでした。私たちが家族も空襲警報が出され、避難する度に離ればなれになり、夜が明けると互いを探すのに必死でした。

昭和二十年三月十日の東京は、アメリカ軍に大変な空襲を受けました。まず、アメリカ軍は照明弾を落として目標を確認し、かつてないほどの焼夷弾を落としていったのです。それは、防空壕に収納してあった財産を取りに行く暇もないほどで、子どもを背負い、おしめをトランク二つに詰め、爆弾の雨の中を死ぬ思いで逃げまどいました。

この大空襲で家は焼け落ち、手元に残ったものは



千人針／布に千人の女性が赤糸で一針ずつ縫って、千個の縫玉を作り、出征将兵の武運長久、安泰を祈願して贈ったもの。「虎は千里走って千里を戻る」の伝説から、虎の像が描かれ、寅年生まれ女性には、その歳の数だけ縫ってもらった。
所有：倉地ふみ子



時局防空必携／空襲に備えて、各家庭、隣組などの装備と心構えを説いたもの。

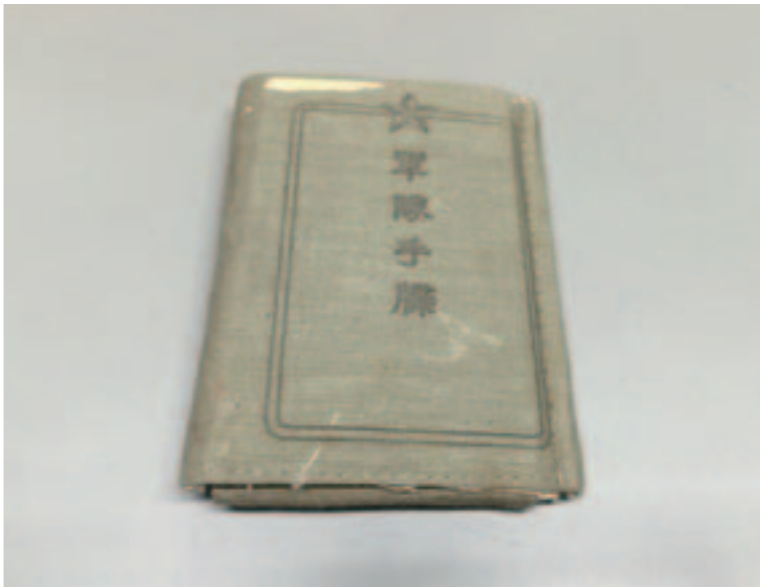


所有：倉地ふみ子

防空壕に収納しておいたものだけでした。空襲で焼け出され、私たちは東京から長久手に戻るしかありませんでした。当時は、東京から名古屋まで汽車で八時間かかりました。また、バスも東山(名古屋市千種区)までしか運行しておらず、そこからは徒歩で長久手まで移動した記憶があります。

その後、日本は終戦を迎えました。ラジオから流れてきた昭和天皇の玉音放送は今でも忘れることができません。この放送を聞いて、私は、日本が戦争に負けたのだと思いました。そう思うと涙が止まりませんでした。私だけでは、皆も泣いていました。

戦争中は、人々の生活に必要な食糧、衣服、燃料等を自由に手に入れることができないばかりか、いつ死ぬか分からない不安に押しつぶされそうな日々を過ごさなければなりません。いいことは何一つありません。二度と起こしてはならないのです。



軍隊手帳／軍人としての身分や心構えなどが書かれていた。 所有：倉地ふみ子



戦陣訓／昭和16年1月8日、陸軍大臣より全陸軍に示達されたもの。中国に於ける戦争の長期化に伴い、戦地における軍の規律を訓示した。戦場における軍人の具体的な行動の準拠を示し、軍紀の確立と住民の保護を強調している。 所有：倉地ふみ子

現在の想い

倉地 ふみ子さん

世の中に正しいことほど強いものはありません。ですから、日本は、憲法で他国を威すようなことを一切しないと決めているのです。

例えば、よその国と争いごとが起こったときです。

決して、戦争によって相手の言い分を通そうとしない。これは、誤ったことであり、戦を仕掛けることは、結局、自分の国を亡ぼすこととなります。ときには、暴力は、戦争までいかずとも国の力で相手を亡ぼすことにもなります。戦時中の日本は、対外的に一貫して力の政策が追求されました。これを戦争の膨張主義といいます。

これからは、世界の国々と仲良くして世界中の国々が友達になってくれるようにすれば、日本は栄えていくでしょう。

皆さん、あの恐ろしい悲惨な戦争を二度と起こさないようにしましょう。

私の戦争体験 くあの日はく



長久手市岩作藪田
永田 眞璃子さん

当時、私は、名古屋市中区に住んでいて、家族構成は、母、姉、弟、妹そして私の五人だった。

昭和二十年五月十四日、私が十二歳のときだった。名古屋が誇る名古屋城が、アメリカ軍の大空襲で焼失した。

爆撃機B29の凄まじい攻撃。轟音と紅蓮の炎が名古屋の街を襲った。燃えさかる火の海。私を含め幼子四人を抱えて、母は逃げるのに必死だった。死にもものぐるいでやっとたどり着いたのは、地元の小学校だった。母が閉ざされた講堂の扉を叩き「子どもだけでも入れてください。助けてー。」と絶叫したが、「ここはいっぱいだ。よそへ行ってくれ。」という返事が返ってきた。いくら哀願しても講堂の扉が開くことはなかった。心を決した母は、近くにあった防火水槽に防空頭巾をどっぶり浸して、子どもたちに手渡し、「もう何処にも行くところはないんだよ。死ぬときはみんな一緒だからね。」と先に足を進めた。空爆は、途絶えることなく焼夷弾が滝のように火花を流していた。もう逃げ道はどこにもなかった。

小学校の運動場の片隅の塀に身を寄せると、コンクリートの壁は火傷しそうに熱くなっていた。「怖いー。」口にも出せないほどの恐怖と緊張で、私たちは、四方から母にしがみついていた。どのくらいの時間が過ぎたのだろうか。いつしかあの恐ろしい爆撃音が消えて、夜が明けていた。辺りはもうもうと白煙が立ちこめていて、視界も定かではないなか、消失した無残な名古屋の街の姿が目映った。

行く当てもなく、とりあえず現在の一宮市の田舎の知己を頼って、私たち一家は、一路名古屋駅を目指した。ブスブスとまだ白煙を上げ続ける瓦礫。性別さえ分からない無数の遺体。恐怖の一夜を体験した人々がほとんど無表情で、目的もなくノロノロと歩いていた。この様子は、まさに地獄絵図だった。やっと名古屋駅に到着し、列車に乗り込むのも戦争だった。我先にと列車の窓から乗り込む人たちの怒号と罵声。私たちは、何度



ホームへ放り出されたことか。ほとんど身ひとつで知己のいる田舎に辿り着いた私たち家族だったが、ここでも戦争が続いていた。母屋から離れた農作業小屋を居宅にあてがわれ、農作業の経験のない私たちは、厄介者扱いだった。そんな差別に泣き、また、貧乏人のくせに女学校へ行っていると陰口を叩かれ、私は、多感な少女時代を暗い気持ちで過ごした。終戦は、疎開先のこの田舎で迎えた。玉音放送は、母屋から流れてくるのを庭で聞いたが、内容は分からなかった。私は、日本が負けたことを知らされて虚無感に襲われた。

平和な時代であればこそ、人間は他人に優しく接することもでき、心の絆を繋ぐこともできる。もう二度と戦争を起こさせないように切に願いたい。これが八十路を辿る私の切なる遺言である。

現在の想い

永田 眞璃子さん

焦土と化した敗戦国の国民が必死で立ち上がり、必死で働いた結果、日本は飛躍的に復興し、目を見張るほどの経済成長を遂げ、国民生活は年々豊かさを取り戻しました。

しかし、その反面、様々な負の一面も浮き彫りにされました。例えば、経済格差、貧困児童の増加、高齢者問題等々。

世界各地においてもテロや暴動の勃発が後を絶たず、これが戦争の導火線になりかねないかと心配しています。

近頃では、この国でも憲法改正の論議がかまびすしいが、再び戦火を交える世の中になってはなりません。軍国青少年として洗脳され、無残な子ども時代を過ごした私たち世代だからこそ、戦争の愚かさの意味を後世に伝えていかねばと強い使命感を覚えます。

平和こそが人類の最も幸せな生きる道なのです。

戦死した父への思い



長久手市池田
水野 和子さん

私が六歳のとき、父は戦地に出征しました。昭和二十年の寒い日でした。長湫景行天皇社の前で送別のあいさつがあり、父は村の人々に日の丸の旗で見送られ、オート三輪車に乗って名古屋の方へ行っていました。

召集令状の赤紙が自宅にきてから出征の前日まで、父は、家の周りや離れ、米蔵を一生懸命に掃除していました。これが父との最期の別れと感じたのか、私は父のそばを離れることができませんでした。父は、近所の人に「留守にしますので、家のことを頼むぞな、頼みますぞな」と頼んでいました。父が出征してしばらくすると、アメリカ軍の大型爆撃機B29の空襲が激しくなってきました。ある夜、防空壕から出て、西方の名古屋を見ると焼夷弾爆撃による火災で、空一面が真っ赤になっていました。

当時、私たちは国民学校(現在の長久手小学校)に入学し、一、二年生は、近くの分教場で学びました。空襲警報が鳴ると、必死で下校することが度々ありました。また、自宅の近くの県道を日本軍の戦車が轟音を立てて走ることもあり、怖くて近所の

麦畑の中に身を隠し、やり過ぎた記憶があります。

ある時、現在の名古屋市名東区藤が丘付近にB29が墜落し、現場に見に行きました。そこでは、機体が散乱し、我慢できないくらいのお臭が鼻を襲いました。また、アメリカ軍の兵士の遺体もあったようです。

夏になった昭和二十年七月中旬、父の戦死の公報が自宅に届きました。亡くなったのは、七月二日と記録されていました。父は、母と私たち兄妹三人、それに祖母を残して三十六歳の若さで亡くなったのです。母は、公報を見て縁側で泣き崩れました。後日、父の戦友の話によると、九州の筆立山の弾薬庫入り口で、艦載機の機銃掃射で撃たれたそうです。父は、弾薬が大量に保管してある弾薬庫の中に入ると危険と感じ、弾薬庫の入り口にいたと



聞いております。父の戦死で、母子家庭となってしまった私たちの生活は大変なものでした。祖母は、非常に落胆し、病に伏してしまつたのです。母は、生計を立てるため、リヤカーに野菜を積み、長久手から名古屋の大曾根まで、早朝から行商に出かけなければなりません。当時は道路が整備されていなかったため、本当に一日仕事でした。私たち兄妹も学校が休みの日には、母の手伝いで名古屋まで行商に行きました。苦しい時、もし父が生きていたらどんなに幸福だろうかと何度も思いました。天国の父が助けてくれたのでしょうか、おかげさまで今日まで、生きることができました。

これからは、戦争によって、私たちのような母子家庭の悲しい思いを誰にもさせたくありません。子供や孫が、戦争に行かなくてもよい平和な世の中になってほしいと切に願っています。



整備された弾薬庫

現在の想い

水野 和子さん

今年の四月、父が戦死した門司市の筆立山に、家族で慰霊の旅に行きました。門司に着いた夕方、最上階が展望台になっている門司港レトロハイマートビルに上りました。東窓面に夕日に輝く新緑の山が見えたので、展望台の店員に山の名前を聞くと、その山が筆立山でした。予期せぬ導きに、家族三人は筆立山に向かって合掌しました。艦載機に撃たれた父が、じっと私達を見ているようでした。

翌日、福岡在住の知人の案内で筆立山、古城山、父が死んだ第一弾薬庫を訪れました。弾薬庫は整備され、周辺は駐車場と公園になっておりました。公園の樹木に長久手から持って行ったボトルの水をかけ、父の安らかな眠りを祈願し、慰霊の旅の願いが叶いました。

戦後七十年記念誌「平和への願い」に掲載して頂き、有難うございました。



大空襲の思い出



長久手市根嶽
もりのがくえん
安井 俊夫さん

昭和十九年、私が国民学校（現在の小学校）に入学した秋頃になると空襲が激しくなってきた。アメリカの大型爆撃機 B 29 の編隊が、日中堂々と来襲し、爆弾や焼夷弾を雨のように投下するようになった。当時、世界最大の爆撃機であった B 29 は、「超空の要塞」とも呼ばれ、日本の一般人の人達からもビーニクと言って恐れられていた。

昭和二十年になると、空襲は更に激しくなった。これに対して、日本の防空体制は、極めて弱体であった。戦争による被害は、東京や、名古屋、大阪などの大都市や工業地帯に集中した。名古屋は、軍用飛行機製造の中心地であったため、六十三回にわたり空襲の被害を受けて、市街地はほとんど焼野原に近い状態になった。

特に、昭和二十年五月十四日の朝の名古屋への空襲は、名古屋市街地北部とその中心にある名古屋城を集中的に爆撃した。正午前に空襲が終って、疎開先（現在の清須市）の防空壕を出ると、名古屋の上空を覆う煙の上に火柱が見えた。私は大人たちと一緒に、一キロ程南の庄内川の堤防まで走った。多勢の人達が口々に「お城が燃えとる。」と言って悲しみ、泣いている人も多かった。名古屋城炎上、その光景は、七十年後の今も忘れられない。

この日の空襲は、後日の記録によると、B 29 だけでも四百四十機以上が来襲し、今でも「名古屋大空襲の日」と呼ばれている。この大空襲では、尾張名古屋は城でもつと言われた、国宝第一号名古屋城の金鯱輝く天守閣、本丸御殿、隅櫓などが灰塵に帰してしまった。この口惜しさ、心の寂しさは計り知れないものがあった。子ども心にも残念で泣けてきた。



戦争は、このように、人の命だけでなく、町も歴史的な文化も破壊する残酷、悲惨な

行為である。太平洋戦争当時の長久手は、農村地帯で空襲の戦禍は免れたが、当時の生活は苦しかったと聞く。そうした苦労の上に築きあげられた現在の地域社会を大切にしたい。

現在の想い

安井 俊夫さん

私が四歳の時に太平洋戦争が勃発し、国民学校二年生の七歳の時に終戦を迎えた。当時の昼夜を分たぬ空襲による爆弾、焼夷弾攻撃、防空壕での避難生活、食糧や生活物資の遅配と欠配、栄養不足、田舎への疎開生活等々、小国民にとっても厳しい毎日であったことは今も忘れません。こうした当時の子ども目線で見えた銃後の生活を後の世代の人達にと考えて、平成二十五年に戦争体験記『大空襲 名古屋のお城が燃えとる』を発刊しました。丁度、終戦七十周年が話題になり始めた頃でもあり、名古屋の小学校での体験談の語りが新聞報道されたことがきっかけで、長久手市の子ども達にもという依頼があり、平成二十六年一月から六つの小学校の六年生に各学校の授業に合せて、これまでに十六回、千五百人以上に話をしました。後日生徒一人ひとりの感想文が校長先生から届きました。これがうれしい。

「お話を聞いて戦争は本当に恐ろしいと感じました。」「戦争のことについてよく分かりました。今の平和を大切にしたいです。」という子ども達の顔が輝いています。やりがいを感じます。これからも語り部を続けます。

戦中の思い出



長久手市前熊下田
與語 麦生さん

昭和十六年十二月八日、小生が長久手国民学校初等科二年生のとき、太平洋戦争が始まった。その頃は、あまり身近に戦争の怖さが分からなかった。小学校四、五年生の頃、村の小学校の校舎に兵隊さんが常駐するようになり、将校さんたちが乗る馬の飼料にするため、草刈りを手伝った記憶がある。また、男子児童は、二本の青竹を使って桑の木の皮を剥ぎ、それを竹竿に干してから学校に行ったものだ。桑の木の皮は、長いもので数メートルもあった。乾燥させて加工すると丈夫な繊維になるので、兵隊さんの軍服にするとか聞いていた。

食糧を確保するために、小学校の校庭を掘り返して芋畑にしたり、色金山の北法面を開墾して、さつま芋を作ったりした。大草の権道寺の山から防空壕の材料になる松の木も切ったりした。当時は未舗装で埃を上げて何本も学校に運んだ。小学校の校庭に防空壕を作ることが優先され、とにかく学業はそっちのけだった。しかし、大勢で仕事するのは楽しかった。

小学校高学年になると三ヶ峯の県有林で野うさぎ狩りをした。山の麓に長い網を張り、大勢で一列になって、大声で山の裾から谷間に向かって追い出していく。一度に五、六匹は捕ることができた。捕獲したうさぎを学校に持ち帰り、皆でうさぎ汁を作った。もともと、我々児童のうさぎ汁には、汁だけで肉は入っていなかった記憶がある。また、登校前には、地元の神社に兵隊さんの武運長久を願って軍歌を唄い、男女ともに日参した事も思い出す。

戦時中、我が長久手村においても、大勢の兵隊さんたちが野戦訓練のために村内の民家に寄宿した。長湫のある地主さん宅に将校級の兵隊さんが泊まり、軍馬が繋がれたクロガネモチの木、通称フクラシバの大木をかじった傷跡が戦後七十年たった今でも現存している。

終戦間近の昭和二十年三月末、名古屋市営地下鉄車庫、現在の丸山住宅付近に B 29 爆撃機



が墜落したと聞いたので、自転車で見に行った。爆撃機の車輪の大きさに驚いた。爆弾を積んだまま、高射砲で撃たれ落ちたようであった。

終戦直前には、中根原の田んぼに二か所、琵琶ヶ池に一か所、B 29 爆撃機の爆弾が落とされた。当時の大人たちの話では、米軍が帰り際に機体を軽くするため、何も無いところに爆弾を落としたのではないかとのことだった。

小生が国民学校初等科六年生のときに終戦を迎えた。ところが、学生時代に想い出づくりに欠かせない修学旅行が、終戦のごたごたで中止になってしまい、齢八十余年過ぎた今でも残念でならない。戦争は、二度と繰り返さないことを願う。

現在の想い

與語 麦生さん

今後の活動については一番の趣旨は平和。このまま平和が続いてくれれば一番いい。若い人に言いたい事は、もちろん体験者ではないですし、戦後七十年も経っているのに、関心が無いかもしれないけれど、広島原爆、そしてそこからの現状(復興)をみんなに見てもらい、平和がどのくらい達成しているのかという事を感じてもらいたいと思います。

語り部としては、とにかくもう戦争体験者が八十代から九十代の人が多いので、難しい問題かもしれないが、若い人にどう伝えていけば良いのかを考え、そして何より、関心を持ってもらわなければいけない。いま日本は平和すぎる。身近では自分の息子や孫でも、戦争があったという事を知らない。戦争体験者は運が悪かったというだけの事で、過去のものとして片付けてしまう。少しずつでも事実を伝えていかなければいけないと思う。

学徒勤労動員と東南海地震



長久手市氏神前
永田 宏さん

当時、私は知多郡八幡町(現在の知多市)に住んでいて、家族構成は、父、母、私と第二人であった。昭和十九年四月、(旧制)中学五年生になった即日、半田市内にあった航空機製作の軍需工場で働くことになった。機体を組み立てるリベットを打つエアハンマーの響き、ガス溶接の埃と臭い、工場全体から湧き上がる騒音の中に、教科書も授業もどこかに吹っ飛んでしまった一年五か月の始まりであった。

一般工員、我々動員学徒(男女)、徴用工員、女子挺身隊員らが渾然一体となって「一機でも多く」を合言葉に頑張っていた。学徒は、県内はもとより、遠く京都、福井、山梨、香川、高知、鹿児島などの各府県からもきていた。休日は、月に二日、支給されたのは南京袋みたいなスカスカの作業服一着だけで、勿論冷暖房などはない。よく夏バテもせず、風邪もひかず保っていたと思う。若さと気が張っていたからであらう。

勤労動員中、忘れ難いのは同年十二月七日午後発生 of 東南海地震である。職場で激しい揺れに気付き、慌てて建物の外へ逃れた直後、土煙をあげて屋根が崩れ落ちた。一瞬の間であった。工場は埋立地に建てられた煉瓦造りの元紡績工場であった。煉瓦が崩れ落ちて多くの工員や学徒が犠牲になった。生死は紙一重、全く運不運という事を痛感した。

八月十五日、終戦の放送は工場で聞いた。ソ連も参戦したし、頑張れ、という放送かと思っていたら、天皇陛下のかん高い悲痛な感じの声にとまどった。「(四国ノ)共同宣言ヲ受諾」で、「ポツダム宣言」の事かと思ひ出し、それを「受諾」とは、と頭が混乱している間にも放送は進み、「堪へ難キヲ堪へ忍ヒ難キヲ忍ヒ」が



聞こえ、「アア、負けたのだ。」と悟った。その夜は、宿舍の窓を開け放し、電灯の覆いを外して、明るさを満喫した。

この数か月、御先真っ暗の閉塞感から俄かに解放されてホッと一息つき、なんとか生きのびることができた、とひそかに安堵したのであった。

現在の想い

永田 宏さん

戦争は絶対に避けるべきである。もしも、第二次世界大戦が始まったら、人類はおろか、地球全体の破滅に至る。戦争になりそうな予兆が発生すれば、些細なことでも摘み取らねばならない。始まってからでは遅いのである。現代の戦争は国家を挙げての総力戦である。一旦始まれば(或いは始まる兆しのある時から)、たちまちモノは姿を消し、値段はつり上がる。日常生活は不合理と非効率に終始する。

暖衣飽食にドップリ浸かった「戦争を知らない」方々には想像してただけるだろうか。戦争を始めるのは容易である。しかし、これを終息することは難しい。冒頭にも書いたように大事に至りそうな予兆があれば、為政者には速やかに摘み取り、破局に至らぬよう努力を願いたい。一方、我々国民も世界情勢をよく見極め、時流に流されない様、心がけるべきであらうと思う。人生の残り少ない老人の杞憂に終われば幸いである。



両親から聞いた

第二次世界大戦の記憶



長久手市蟹原
藤田 恵美さん

私の両親は、昭和十七年頃に結婚し、当時の満州国に渡り、その数年後に終戦を迎えました。戦争が終わると両親は、満州で生まれた兄を連れて引揚船で日本に帰ってきました。私が子どもの頃、父は夕食の度に、「戦争中は何をすることも命がけだった。」と話してくれました。当時、小学生だった私は、毎日、夕食の度に父から戦争中の話を聞かされ、「またか」と思っていたので、今でも鮮明に覚えています。

両親はすでに亡くなっていますが、まだ二十歳を過ぎたばかりの若い二人にとっては、想像を絶する出来事だったと思います。現在、私は孫がいる歳になり、あの時両親から聞いた体験談を風化させずに、次の世代へ引き継いでいかなければと思いました。

両親が満州にわたった当初は、バラ色の生活だったようですが、それも長くは続きませんでした。昭和二十年八月に日ソ中立条約を一方的に破棄したソ連軍が満州国に攻めてきました。父は、捕虜として捕まりシベリアへ連れて行かれそうになりましたが、途中で汽車から飛び降り、見つからないよう車輪に隠れながら何とか逃げ延びることができました(見つかったら殺されていました)。

また、母は、ソ連軍兵士に暴行されるといけないので、身重な体で必死に逃げ回った末、満州の地元の人たちに助けられ無事に長男を出産しました。

その後、父は母と再会することができ、乳飲み子の兄を抱えて(お腹の前に縛って)引揚船で日本に帰ることができました。幸い兄は元気に帰ることができましたが、船内には十分な食べ物がなかったので、母親のおっぱいが出ず、病気や栄養失調が原因で、何人もの赤ちゃんが亡くなるのを目の当たりにしたそうです。亡くなった赤ちゃんは、海へ投げ入れるしか方法が



なく、本当に地獄だったと聞いています。

また、父は、旧制高校時代、名古屋城下で行われた訓練中に何度も往復ビンタを受けたそうで、生前名古屋城へ行くと、「その時の辛い思い出が蘇ってくるから近くを通りたくない。」と話してくれました。

以上が両親が語ってくれた第二次世界大戦中の体験談の記憶です。

現在の想い

藤田 恵美さん

若い世代の方へのメッセージですが、まずは、日本や世界の歴史の中で、こういった戦争があった事実を受け止め、それを知っていただきたいと思います。そして、二度と戦争が起こらないようにするには、どうしたらいいのかを考えて行動していくという事がすごく大切ではないかなと思います。ぜひ、若い世代の方には、そんなことを、特に八月には考えていただけると良いと思います。

この委員会に参加し、非常に多彩な方と出会うことができ、すごく良かったです。特に、実際に長久手で、どんな戦争被害があったのかという事が、だんだん語り部の方のお話によって、分かるようになってきたので、ぜひそれを、記録として残していけたら良いと思っています。

できれば子供たちが直接、語り部の方から戦争体験を聞く機会が持てるような、そんな活動につながっていければ良いと思っています。

B29 墜落す



アドバイザー 小林元

太平洋戦争の戦局はだんだんきびしくなり、若い男子は戦場に送られ多数の戦死者も出ました。食料は不足し物資も乏しくなって人々の生活はますます苦しくなりましたが、昭和十九年の十二月には、ついに米軍機による大空襲が始まりました。まっ先にねらわれたのは矢田大幸町にある三菱発動機工場でした。ここは当時の日本の航空機用エンジンの大部分を生産していた関係上、最初はそんなに大きな工場ではなかったのですが、戦局の進展とともに拡張が続き、ついに西は矢田町から東は猪子石の西部まで、鍋屋上野の台地と矢田川にはさまれた地域の大部分を占有する大工場になっていました。数度の大爆撃によって工場は壊滅し、工場の周辺は蜂の巣のように爆弾の穴があき、それら爆弾は猪子石はもとより、藤森や森孝新田にも落ちて多数の犠牲者が出ました。

名古屋市内の主な軍事拠点を破壊してしまうと、米軍は焼夷弾による夜間爆撃を開始しました。これは一般民家をねらった無差別爆撃で、とくに昭和二十年の三月十二日、十九日、二十五日の三回の夜間空襲により、名古屋市内は焼野原になりました。三月二十五日早暁の空襲は、B29爆撃機百三十機によって名古屋市の東部が主な目標にされました。この夜米軍機は照明弾をまじえて爆弾二千六百五十発、焼夷弾三万二千三百発を投下したため、死傷者およそ二千八百名、家屋の焼失破壊



壊滅した三菱発動機工場(昭和22年当時)

四千九百戸、被災者は二万八千名を超えました。

空襲もたけなわのころ、上空で一機のB29がメラメラと炎を出すと同時に、機体が傾き始めました。一瞬かん声をあげた長久手方面の人々も、機体が大きな火の玉となって東方に向かって落ちて来るのを見てあわて、ふためきました。大音響とともにその火の玉は、現在地下鉄藤が丘車庫の東北端にあたる丸山池のほとりに墜落しました。夜明けとともに近在の人々が大挙して集まって来ました。長湫の人々によって墜落機の残がいの中から七名の米兵の遺体が収容されました。当時は極端に物資が不足していたため棺を作る板もなくて、やむなくわらのこもで遺体を包んで、長湫字野田農にある墓地の一隅に葬りました。戦後進駐して来た米軍がその遺体を掘って持ち去りましたが、もし当時長湫の人々が遺体を粗末に扱っていたら、戦争犯罪人として裁かれたかも知れません。

『香流川物語―長久手・猪子石の今昔―』より



平和への想い

長久手市中学生広島平和体験学習事業

平成二十七年八月五日及び八月六日に、長久手市内在住の中学生十五人（三年男子一人・女子二人、二年男子二人・女子一人、一年男子三人・女子六人）が広島を訪問して広島平和記念資料館等を見学し、平和記念式典に参列しました。

戦争の悲惨さ、平和の意義について学習しました。

※感想文についての在籍校・学年は平成二十七年当時のものです。



長久手中学校（一年） 加藤 春香

私は、原爆ドームや広島平和記念資料館の写真を見た時、おもわず息を飲んでしまいました。あまりの恐ろしさに、残酷さに、胸が痛みました。

原爆ドームは、教科書などで見たことはあるけれど、本物は見たことがありませんでした。迫力が全然違いました。原子爆弾の恐ろしさを、動かない証人として、その事実を物語っていました。ものすごく暑かったけど、その暑さが寒気に変わったくらいでした。

広島平和記念資料館に入った時、その恐ろしく残酷な写真や遺品に、心がとてもしめつけられるように悲しみがわき上がってきました。原爆の熱風で、着物の模様が皮膚についた女性、八時十五分で針が止まっていた時計、くしを入れたらあつという間にとれてしまった髪の毛、さだ子さんが本当に折った折りづるなど、どれも目に焼きついていきます。他にいた観光客の人たちは、写真を撮っていたけれど、私は、あまりの恐ろしさに、とても写真なんて撮れませんでした。

そして、平和記念式典。ケネディ大使や安倍首相など、国内だけでなく、外国から来ている人も多く見られました。暑くて大変だったけど、こんなすごい式典に出ることができて、良かったです。いろいろな方々の話を聞いて、胸がうたれました。

私は、原爆ドームを見たり、平和記念式典に参列したりして思ったことは、やはり、「絶対に戦争なんかを繰り返してはならない。」ということです。実際に行って、改めてそう思いました。とてもこわかったけど、貴重な体験ができて良かったです。写真などを見ると、被爆者の人たちの叫びが聞こえてくるようでした。戦後七十年という節目の年をさかいにして、世界から戦争がなくなることを祈っています。

僕は、学校からもらったお便りに「広島平和式典参加者募集」とあり、原子爆弾で罪もないのに亡くなった多くの人々の事をずっと前から学びたいと思っていたので勇気を出して応募してみました。思いがけず参加させていただけることになり、折り紙の鶴を折りながら、待ちどおしく、とても楽しみにしていました。八月五日、ついに広島へ行く日になりました。広島は思っていたとおり「広島」という感じが出ていて、なぜかつかい感じがしました。こんな平和な街に、七十年前原爆が投下されたなんて想像できませんでした。

おいしい広島焼きを食べてから、原爆ドームを見学に行きました。こんなにボロボロになるほど原爆の力は強いのかと、本当に驚きました。その後、原爆資料館を見に行きましたが、当時の人が焼けこげたイメージの人形や、きのこ雲の写真、人の影だけが残された石、投下された八時十五分で止まった時計など、「本当にあった事なのだ。」と、その恐怖に言葉を失うほどの衝撃を受けました。僕は日本の偉い人達が間違った考え方をしていたために、幸せに暮らす多くの人々が犠牲になった事がかわいそうだと思います。また、「間違っている。」と言葉に出すことも許されなかったと知り、今の時代に生きることが幸せなことだと感じました。次の日、平和式典に参加して多くの人々と一緒に平和への誓いを込めて八時十五分、もくとうをしました。

今回、原爆や戦争について色々なことを見聞きし学んだことを、忘れたくないと思います。どんな理由があっても、多くの人の命が一瞬でうばわれる原爆は絶対に、二度と地球で使ってはいけません。小さいことですが身近な人や動物や自然を大切に生きていきたいです。貴重な機会を作って下さり、本当にありがとうございました。優しく引率して下さい、初めて会う人が多かったけれど、安心して旅ができました。

八月五日と六日、広島に平和を学びに行きました。二日間で、原爆ドームや平和記念資料館を見学し、平和記念式典にも参加しました。充実した二日間でした。

中でも一番印象に残っているのは、平和記念資料館です。その中でも「人影の石」からは、原爆のおそろしさを深く感じました。「人影の石」の石段には、黒い影のようなものがありました。それは人が腰かけていた場所で、原爆の熱線によって周りが白っぽく変色したのに対し、人によって遮られた部分が黒っぽく残ったのだそうです。その人は、逃げることもできず、石段に腰かけたまま、一瞬にして死んでしまったのだらうと思うと、原爆がとてもこわいです。

今回、広島の子供たちが核兵器廃絶を目指して運動をしているのを目の当たりにしました。私もそのためにできる事があれば幸いです。



今回、私は長久手市の中学生の代表の一人として、終戦七十年の記念式典に参列する為、広島へ行ってきました。

初めて見る原爆ドーム。骨組しかありませんでした。当時の威力が伺える建物でした。

資料館では、原子爆弾投下直後の被爆した人々の様子などが展示してありました。私はその展示物を見て、原子爆弾の恐ろしさをしみじみと感じました。特に、被爆した人たちの、抜けた髪の毛や爪などの展示物が私の中では印象的でした。

平和記念公園に、皆さんから預かった千羽鶴を、無事届けることができました。私達以外にも、海外から訪れた観光客がたくさんいました。平和を願っているのは日本人だけではなく、住んでいる場所が違ってても、持っている考えは一緒なんだなあと思いました。

式典は、まず広島市長による式辞から始まりました。安倍総理は戦争のことを語られていました。周りの雰囲気は、とても重たい感じでした。

この平和な日本で暮らせるのも、憲法第九条のおかげだと思います。世界では未だに戦争やテロで犠牲になって苦しんでいる人がたくさんいます。そういうことがなくなるように、まずは、自分にできることは何があるのか、よく考えてみたいと思います。その上で、この世界が平和になることを願います。



私が広島に行つて思ったことは、「平和に対する思い」がとても強いということでした。テレビのCMも、そういうものが、すごく多くて、自分が想像していたものよりも多かったので、驚きました。あと、核廃絶の署名や、デモの人が、本当にすごかったです。

博物館では、生死の境みたいな模型があつて、なんかすごくリアルで、悲しくなりました。あと、本物の服や、壁、レンガなどがあつて、服はボロボロで血がういていてぞわっとしました。あと、被爆による被害も初めて知つて、髪の毛が抜けたりするのも知りました。本当に怖いと思いました。

私は家に帰った日の夜テレビで、被爆した方が話をしていて、「いろんなことを乗り越えてきたから、ちよつとのことでも若い人たちには負けない。」と言っていて、私は確かに勝てないと思いました。

私は、「水をください。」と言っているのに、水をあげたら亡くなってしまう理由が、ずっと分からなかつたです。でも、広島平和記念資料館に行つて、「安心して、緊張が解けて、亡くなってしまう。」というのが分かりました。家に帰つて調べてみたらその意見の他にも、「水分をとると、血流が良くなつてけがをしている場合は、出血する場合があります。」と書いてありました。

一日目に食べた広島焼は、めちゃくちゃおいしかったです。

すごく貴重な体験ができてすごくよかったです。応募してよかったと本当に思いました。色々な原爆のことなどを知ることができいい勉強になりました。

私は、今年の八月五日と六日に広島へ平和体験学習に行きました。広島を訪れたのは今回が初めてでした。普段テレビで見ている原爆ドームや平和公園、たくさんの方々の原爆に関する資料などを初めて自分の目で間近に見て、私の中の戦争・原爆のイメージがかわりました。テレビで見るときは本当になにげなく資料や当時の映像を見ていたけど、自分で見たときは、原爆の被害の大きさや悲惨さをまじまじと思い知らされました。資料の中には、当時のお弁当やカバンや服などがそのままの状態に残されていて、それらを見たときは本当にショックを受けました。資料館内には被爆者の方々が当時のことを話されている映像が流されていました。私は二人の方の映像を見て、物の資料とはまた別の思いが伝わってきました。原爆ドームは本当に骨組しか残っておらず思っていた以上に残酷なものでした。その近くを流れる川は当時はたくさんの方が亡くなった状態で水と共に流れていたとき、「今はこんなに美しい川なのに。」と少し信じられませんでした。

翌日の平和式典では多くの人がいて、その中には外国の方もたくさんいておどろきました。式典中、たくさんの方が原爆、平和について語っていて、「やはり平和が一番だ。」と改めて思いました。

私は今回の体験で、戦争・原爆の悲惨さ、残酷さを感じると共に、平和の大切さも強く感じました。普段、今の平和な世の中で生活していて、戦争を知らない私たちにとって、実際に広島へ行き、実際の資料、映像を見たりすることによって、少しでも多くの知識を得て、戦争の事をよく知ることができた今回の体験は、これからの私にとっても良い経験になりました。今回の平和体験学習に参加することができてよかったです。

私は、原爆投下から今年八月六日で七十年目となった広島を訪れ、原爆ドームと広島平和記念資料館の見学、平和式典への参加をさせて頂きました。

広島平和記念資料館に入った瞬間言葉を失いました。自分の想像をはるかにこえるひさしさだったからです。全身火傷で皮膚が垂れ下がったり、ガラスが突きささり死んでいく子供。家の下じきになり、燃えながら「助けて」と泣きさけぶ声が聞こえてきそうでした。たった一発の原爆で多くの人々が命をおとし、また、後遺症で苦しみ続けるのです。すべて見学し終わった後、無差別に人を殺す原爆が許せなくなりました。

毎日あたりまえに学校に通ってあたりまえに勉強できていることがどんなに幸せかよく分かりました。幼いころに被爆し、亡くなってしまった人のことを思い、今私達にできることは「戦争」から目をそむけず、しっかりと知り、風化させないことだと思います。

日本だけでなく世界の人々が平和に暮らせる日があることを願います。



ボロボロになって、まっ黒になってヒビが入ったレンガ、中身が黒くこげた弁当箱、原爆の放射線、爆風、熱線を受けて大きなケガや病気をもって苦しむたくさんの人々の写真。原爆ドームや広島平和記念館の遺品、当時の写真は、衝撃的なものばかりでした。

たくさんの被害を出した原爆のエネルギーの約半分は爆風を起こすもので、広島ほとんどの建物を壊し、人々が飛ばされたそうです。約三十五パーセントが熱線で、まちを焼け野原にしました。約十五パーセントが放射線で、病気にさせたりしました。今でも苦しんでいる人もいます。この原爆で約十四万人が亡くなってしまいました。

世界で、原爆が投下されたのは日本だけです。たくさんの被害があったので、日本は、どこの国よりも平和を考えなくてはいけない国だと思います。なので、たくさん日本人が、悲しい戦争や原爆の被害があった事実を知ってほしいなと思いました。ぼくは、この事実を知って、つらかったです。

平和記念式典では、内閣総理大臣をはじめ、広島市長や広島市議長などが、戦争の悲しみや平和への思いを演説していました。

千羽鶴を付ける時に、力のある色あざやかな千羽鶴が付けられていて、ぼくはびっくりしました。そこには、たくさんの人たちの「平和がいつまでも続いてほしい。」ということが伝わってきたような気がしました。みんなが作った千羽鶴を、平和の思いを込めて付けました。

ぼくは、「原爆や戦争のおそろしさ」と「平和の大切さ」を広島県で学びました。二度と被害が出たり、人々が悲しむ戦争が起こらないように、日本はもっと平和を尊重してほしいなと思います。

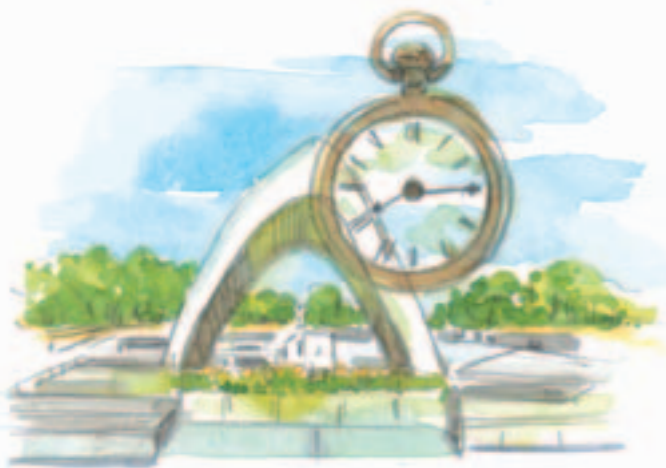
安倍総理大臣には平和をもっと考えてほしいと思いました。

広島県の町は原爆が本当に落とされたか分からないくらいきれいでした。原爆が落とされた当時の写真は何もなく、本当に何もなかったのに、今はとてもきれいなので、今のおじいちゃんたちががんばったんだなと思いました。

原子爆弾はすごく大きくはないです。大きいけど、すごく大きいというわけじゃないです。だけど広島をなにかもをなくすぐらいだから、威力はすごくあると思います。その爆弾をつくったのはすごいと思います。だけど、戦争でそれを使うことには反対だと思います。当時は日本も戦争をしていたから戦うことはあると思います。でもそれは日本にも責任があると思います。だけど原子爆弾を落としたらどうなるか分かっているのに落とすのは絶対いけないとぼくは思います。だから戦争も核兵器も今のこの世の中からなくしたらどこの国もずっと平和でいられると思います。

まだ、日本以外の国は戦争をやっているところもあると思うけど、何にも罪がない人が殺されるのは絶対にだめだと思います。今日本は平和だからこのことはずっとつづけていかないといけないと思いました。

色々な国の人や、色々な人がいるけどみんなが平和だと思えば世界になったらいいと思います。



僕は被爆二世です。でも、被爆した祖父から詳しく戦争のことについて聞いたことがなかったので、ぜんぜん知りませんでした、しかし、広島を平和式典体験学習でどんなにひどいことか知りました。

日本は唯一の原子爆弾を落とされた国です。原子爆弾は様々な被害を日本にもたらしました。熱風によるやけど、放射能による黒い雨。また建物は倒壊してしまい、壁は壊れ、鉄はぐにやぐにやになってしまふ。平和記念資料館を見学して、これは体を傷つけ、心も傷つける最悪なものだと思いました。

被爆七十周年の平和式典では、百一か国もの人々が参列していて、とてもびっくりしました。そして、平和式典に行く時、戦争反対などプラカードをもった人を見かけました。現在日本では戦争をしないという約束をやぶってしまいそうな気がします。僕は戦争はひどいことだと実感したので、戦争をやってほしくないと思心から強く思っています。



戦争を二度としてはならない。未来を担う私達に大人達は教えてきました。小学校三年生頃から国語の教科書には戦争の物語がのせられ、その悲しい物語の結末に小学生達は、「戦争は悲惨なもの。二度としてはならない。」と感じて来たはず。私も、二度と繰り返してはならない惨劇を知っていたつもりでした。けれど、広島に行って私は戦争について本当に「知っているだけ」だったのだと思いました。

広島に行って、一番心に残ったのは原爆資料館でした。原爆で亡くなった人の数々の遺品。とても心が痛くなりました。たくさんの物の中でも、特にカラフルな紙で折られた小さな小さなつるが印象にのこりました。原爆による病で亡くなった禎子さんの折りづるです。彼女は千羽づるを折ると病気が治るといふ話を信じて必死につるを折り続けたのです。小さな折りづるに少しの希望をたくして、自分は死んでしまうのではないか。そんな絶望を押さえつけ、彼女が折ったつるのようにとても小さな希望にしがみつこうようにして生きる少女。その気持ちが痛いほど伝わってきて、なみだをこらえました。

もう一つとても印象深かったのは、被爆した人を再現した像でした。赤黒く不気味な背景に大人と子供、体も服もボロボロの状態で立っているのです。私はその時、自分の想像していたものがいかに生易しい想像であったかを悟りました。現状はもっとも辛く苦しかったのです。「戦争から目を背けてはならない。」そう言った私が戦争の現実から目を背けた瞬間でした。

この体験を通して、戦争の恐ろしさがより強く私の心に現れました。戦争をよく知らない私達には、戦争は遠い存在になりつつあります。なので、こうした学習事業はとてもいいと感じました。今回学んだことを生かし、私は、戦争について今一度理解を深めていきたいです。

私は、八月の五日と六日に広島原爆ドームを見学しに行きました。広島に着き初めて原爆ドームを見たときまわりには人が沢山いて、その中には外国から来た人もいました。

私は友達と一緒にドームのまわりを歩いていたら、お坊さんたちがすすわって、お経などを唱えていました。次に白いテントがあり中に入ると爆弾のせいになった病気の症状の写真や、原爆が落ちて亡くなった子供のことが書かれており、まだこんなに小さいのに可哀想だと思いました。なかには運がよく命が助かった人もいたそうです。次に千羽鶴をつるす場所に行きました。そこにも沢山の人が願いを込めて作った鶴が沢山つるしてあり驚きました。次に広島平和記念資料館へ向かいましたが資料館の前には長い行列ができていて、入るのに長時間かかりました。やっとの思いで入ったらそこには原爆ドームを再現したものがありません。レンガはザラザラでとなりには遺髪が展示されていました。他にも放射線などでボロボロになったレンガやビンなどにもふれました。少し怖かったです。

次の日は平和式典に参加しました。最初に一分間の黙とうをしました。私のすわった席は後ろの方だったので安倍総理などの立派な方は見えませんでした。声は聞くことはできませんでした。他にも色々なスピーチをしておりとても感動しました。平和式典は約一時間くらいで終了しホテルに荷物を取りに帰る時に世界百か国以上から来ているえらい人と思われる人たちとすれちがいました。今回の経験から私は沢山のことを知りました。原爆が落とされて沢山の人が亡くなった犠牲者の気持ちや今が平和でいられる理由もちゃんと知ることが大切だと思いました。この広島平和式典に参加でき、よかったです。

僕は、この長久手市中学生広島平和体験学習事業に行って、本当に多くの事を学びました。

平和記念資料館では、焼けた三輪車や弁当箱などを見て、原爆の恐ろしさを知りました。それと同時に、平和である事はとても大切だと分かりました。そして日本が平和でもありがたいと思いました。

平和記念式典では、広島市長と広島県知事の言葉がとても心に響きました。そして広島市民の皆さんや、広島県民の皆さんがとても平和への思いが強いと知りました。

僕は、直接戦争を経験していません。ですが戦争の恐ろしさを戦争を体験された方から伝えてもらい、そして後世に伝えていく事はできます。僕は今回の事を生かして原爆の恐ろしさや平和の大切さを後の世代に伝えていきたいです。



一日目の原爆ドーム、平和記念資料館では長さ約三メートルという小さな原爆が罪のない人々を殺し、町の風景を壊したことが展示物から分かり、心がしめつけられました。二日目の平和記念式典では、昨年の広島土砂災害で一人の友達を失った小学校六年生二人による「平和への誓い」がありました。大切な人を突然なくした時の気持ちはすごく悲しいものだと思います。だから今、僕が何事もなく平和であることがどれほど難しいことかを実感しました。広島に原爆が投下されてから、今年で七十年が経ち被爆者の平均年齢が八十歳を超えたと聞きました。年々戦争体験者が減っていくなかで、世界唯一の原爆が投下された国として、広島、長崎の恐ろしい記憶を忘れることなく、次の世代へと語り継いでいく必要性を強く感じました。また、学校の授業だけでは知ることのできなかつたことを多く知ることができ、この二日間は僕にとって貴重な体験となりました。



八月五日、六日に平和体験学習で広島へ行きました。初めてで、知らない人がいる中とても不安でした。さらに「私が代表として行ってもらうてよかった。」と思ってもらえるのかなど、本当にたくさんの不安がありました。広島に行く前の準備の千羽づるの制作では、私が一つ一つなげている時に、「行けなかった人たちの分までがんばって来よう。」と思いました。一日目の原爆ドームなどの見学はとても迫力があり、特に資料館では実際に残ったものが展示されていたので、怖いという思いや悲しい気持ちになりました。これらを見て本当に戦争はつらいものだと思えて思いました。その後、みんなで作った千羽づるを置きにいったとき、たくさんの千羽づるが他にもあり、本当にたくさんの人が平和を願っているんだなあと思いました。二日目の平和記念式典では地元の小学生がスピーチをしていて、私よりも小さい子たちがハキハキと言ってとても感心しました。他にも安倍総理や広島市長さんなどがスピーチをしていて、本当に私はすごい場所に来られたのだと思いました。今回を通して行けなかった人たちの分まで私はがんばれたと思います。とても良い思い出になりました。

戦後七十年記念誌作成事業を終えて

本年五月三十一日に、市民が主体となって平和事業を企画、運営していくことを目指した市民の会「長久手市平和事業推進委員会」が設置されました。本委員会は、市民と行政が両輪となって、互いの特性に応じた役割を担いながら平和事業に取り組み、戦争の悲惨さや平和の尊さを後世へと引き継いでいきたいと考えています。市では、平成二十六年九月に非核平和都市となって以来、これまで行政単独で原爆の被害の有様を写真パネルで伝える「原爆写真パネル展」や平和教育の一環として「被爆二世樹木の小中学校への植樹」のほか、「市内中学生を広島市へ派遣」するなどの平和事業が行われています。

昨年、市が市民に対して戦争体験談の寄稿を呼びかけたところ、何人かの方から戦争体験談が寄せられました。どの寄稿文も戦争の悲惨さや平和の尊さが心に響く内容でした。こうした生きた証言をできるだけ多く記録し、後世に伝えていくことは、戦争の事実が風化している現代では、非常に意義があることと思います。本委員会の最初の事業として、まず、これらの戦争体験寄稿文を中心とした記念誌を本年の終戦記念日まで発行する作業に着手しました。長久手市の戦争の事実を伝えること、平和の尊さを未来につないでいくこと、様々な世代の目に触れるものをついことを大切に、記念誌の構想、誌面構成等について議論を重ねました。

また、記念誌の編集作業と平行して、委員会の発案で八月十一日に戦争体験者による語り部事業を計画しました。長久手における戦争の被害や戦時中の人々の不安につつまれた日常のくらしはどんな様子だったのかなど、語り部の体験に基づいた生の声を聞くことで、戦争と平和について改めて考えるきっかけとし、今後市民のみなさんと継続して平和を希求していきたいと思えます。

最後に、記念誌発行に際し、御協力いただきました方々に対して、末筆ながら深く感謝いたします。

平成二十八年八月

長久手市平和事業推進委員会委員長 吉田真砂

戦後70年記念誌

「平和への願い」

～戦争のない明日を築くために語り継ごう～

発行日 2016年8月15日

【長久手市平和事業推進委員会】

吉田真砂(委員長)、松原永吉(副委員長)、
鈴木敏枝、生田範子、原田拓郎、永田宏、與語麦生、藤田恵美、
小林元(アドバイザー)、安井俊夫(アドバイザー)
(以上、順不同・敬称略)

【参考文献】

『香流川物語—長久手・猪子石の今昔—』 小林 元
『長久手町史』

【発行】

長久手市
愛知県長久手市岩作城の内60番地1
TEL:0561-63-1111(代表) FAX:0561-63-2100(代表)
<https://www.city.nagakute.lg.jp>

【制作協力】

印刷ディレクター／大島敏明
企画・制作ディレクター／丹羽達也
デザイン制作／株式会社オーディーエフ 大宮正紀
イラストレーション／スタジオストーク 森沢康代
写真撮影／空 有限会社